

日本語とドイツ語における Eメールの構造の違い ドイツ語教育への示唆

ハーディング・アクセル
広島大学外国語教育研究センター

1 はじめに

本稿の目的は、ドイツ語と日本語の依頼の Eメールの構造を比較することである。両者の違いを質的および量的に記述するために、本稿では、実験研究において収集されたデータを用いる。本研究のために、ドイツ人と日本人の学習者によって書かれた200の Eメールが、実験によって収集された。この実験は、ドイツ語と日本語の依頼を比較するための適切な枠組みを提供する、Brown & Levinson (1987) の「支配力」(*power*)、「距離」(*distance*)、「負荷の程度」(*rank of imposition*) という状況変数に基づいている。これらの変数を考慮に入れることで、本研究における Eメールは、その形式的、構造的、そして言語的特性に基づき分析された。特に関心を持ったのは、依頼の順序である。これは、比較文化的に発話行為を比較するために、Blum-Kulka, House and Kasper (1989) によって開発されたコード化の枠組みを用いて調査された。その分析結果は、Harting (2008) に示されている。本稿で注目するのは、依頼がどのように Eメールの中に埋め込まれているのか、すなわち分析対象となる言語において Eメールでの適切な依頼を形成するために他のどのようなテキスト部分が使われているのかを調べることである。

次節では、Eメールでの依頼に関する研究に関連した理論的な見識について、いくつかの背景情報を提示する。第3節では、本研究で用いられたデータ収集方法とデータ分析方法について説明する。第4節では、分析結果の詳しい報告がなされ、依頼の Eメールを構成している個々のテキスト部分が、データからの実例によって量的および質的に説明される。

2 理論的背景

日本語とドイツ語の Eメールの比較において用いられた方法論的アプローチは、テキスト言語学とポライトネス理論の領域における数多くの研究から影響を受けてきた。先行研究は、口頭における依頼の遂行における異文化間の差異を明らかにした (Blum-Kulka, House & Kasper, 1989)。そして、日本語のポライトネス構造が、欧米の言語とかなり異なっているということが指摘されている (Matsumoto, 1985; Ide, 1989)。本研究の目的は、ドイツ語と日本語の依頼の Eメールの言語的比較である。この主題を言語的に定義するために、先行研究について触れる。Dürscheid (2007) によると、Eメールは「コミュニケーション形態」(*communication form*) であり、実際は電話のようにバーチャルなものであるため、コンピュータや携帯電話などの「コミュニケーション手段」(*communication medium*) とは区別されなければならない。また、「コミュニケーション形態」は、特定の話題または内容的な機能によって同定されるような、「テキストの種類」(*text type*) からも区別されなければならない。これらとは反対に、Eメールには多くの機能が含まれている。具体的には、Eメールは、依頼や謝辞、あいさつや命令などを伝達する役目を果たすことが多いということである。

このような、多機能の「コミュニケーション形態」である Eメールは、表面上の特性として、ヘッ

ダーとテキスト本文という機能的に異なる2つの構成要素を有している。ヘッダーには、件名や送信日時のほかに、添付への言及なども含まれている。テキスト本文には、書き手のメッセージとともに、署名なども含まれていることがある。ドイツ語でのEメールの言語的特性は、Schmitz (2007) により述べられてきた。Schmitz (2007) は、Eメールには単語の短縮や同化、文の決裂 (sentence ruptures)、口語表現、方言などが含まれているため、Eメールにおける文体は口頭によるコミュニケーションの特性を有していると主張している。Schmitz (2007) によると、Eメールで使用される言語が利用される手段によって特徴づけられることはほとんどなく、それらが特徴づけられるためにより重要になるのは、語用論的なコンテキストである。つまり、どの程度書き手と読み手がお互いを知っているのか、そのEメールは個人的な文脈で書かれたものか、それとも公的な文脈で書かれたものかなどというコンテキストがより重要である。それゆえ、Eメールにおいて使用される言語についての一般的な主張は不可能である。

しかし、特定の「テキストの種類」における言語的特性を説明することは可能である。ゆえに、以下に概説されている本研究においては、Eメールという「コミュニケーション形態」において実現される、「依頼」という「テキストの種類」における言語と構成様式を説明していく。

3 実験およびデータ分析

上述した理論的な見識、およびドイツ語と日本語の謝罪に関する研究 (Harting, 2006a 参照) の手法に基づき、筆者は、依頼の対照記述に際して実験的なアプローチを取り入れた。まず、この統制された実験の手法によって、データが、可能な限り問題を伴わずに比較されるよう、「距離」、「支配力」、「負荷の程度」といった状況的な要因を、意図的・操作的な変数として設定した。被験者は、Bielefeld 大学と広島大学の学習者それぞれ100名で、ある依頼をするという設定のもと、実際にEメールを書いてもらった。学習者には、自発的な参加を呼びかけ、参加した者には報酬を支払った。その上で、無作為抽出によって被験者を選定した。Eメールを書くうえでの状況的な変数としては、まず、大学というコンテキストに絞ったうえで、Brown and Levinson (1987) によって提唱された「支配力」、「距離」、「負荷の程度」を基本とした。状況は全部で8つであり、以下、それぞれの状況において、これらの変数をポジティブ (+) ないしはネガティブ (-) の値で示している。

表1 筆記に際しての要因

	Situation	Distance	Power	Imposition	Seniority
1	ゼミの欠席事由の伝達	-	-	-	
2	欠席した授業における資料の説明	-	-	+	-
2(a)	欠席した授業における資料の説明	-	-	+	+
3	発表日の延期	-	+	-	
4	個人的な手紙の修正	-	+	+	
5	海外留学に関する情報	+	-	-	
6	パソコンソフトに関する説明	+	-	+	-
6(a)	パソコンソフトに関する説明	+	-	+	+
7	本の借用	+	+	-	
8	書類記述の協力	+	+	+	

大学というコンテキストでは、「支配力」という要因に対して、二つの極端な立場が想定される。一つは、読み手として比較的高いステータスをもつ教員（支配力：+）であり、もう一つは同等のステータスをもつ学習者（支配力：-）である。また、「距離」の要因においても、二つの極端な立場が想定される。書き手にとって、読み手が良く知った仲（距離：-）であるか、全く知らないあるいは顔見知り程度（距離：+）であるかという点である。「負荷の程度」に関しては、その実行にとって多くの時間や労力を費やす依頼が選択される場合にポジティブな値が示されている（2, 4, 6, 8）。同様に、実行にとって比較的労力を伴わないものには、ネガティブな値が与えられている（1, 3, 5, 7）。日本の社会システムでは、年功序列の原理（ここではSと称する）が言語的な行為に影響を及ぼすため、この変数Sに関しては、追加的に二つの並行的な状況2aと6aを考慮に入れることとした。状況2と6では、それぞれの読み手が同等のステータスの学習者であり、2aと6aでは、読み手が先輩であり、同等のステータスではない。これらの点をふまえて、全8つ（+2つ）の異なる状況を設定し、言語ごとにそれぞれ10通のEメール（N = 200）が作成された。性別という変数の影響を排除するため、10のうち半数を男性と残りの半数を女性の被験者で分けた。

デジタルで作成されたテキストデータは、いくつかの分析段階をふまえ、形態的、内容的、文法的な特徴に従って体系的に調べることにした。内容分析において用いられたアプローチは、Mayring (2003) が「構造化」(*structuring*) と呼んでいる手法に基づいている。この手法は、既に定義されたカテゴリーを体系的に抽出することで、データから特定の内容構造を得ることを目的としている。本研究のために定められたカテゴリーは、Eメールを構成している個々のテキスト部分から成る。ヘッダーには、そのEメールの件名についての言及があることが想定される。また、テキスト本文は、冒頭にあるあいさつと最後にある結びのあいさつから成り立つことが多い。さらに、それらの中には、依頼をサポートするテキスト部分が（依頼そのものの隣に）ある可能性がある。例としては、「依頼の理由」(*grounders*) や依頼によって暗示される潜在的な負荷に対して「気遣う表現」、読み手が依頼を承諾するだろうことに対する「謝辞」や「埋め合わせの約束」などが挙げられる。これ以外では、「読み手または書き手に関係したテキスト部分」という、依頼には必ずしも言及しない部分があると思われる。これらのカテゴリーに分類される項目は、Eメールからコピーされ、類似した分析表へと貼り付けられた後、内容的および言語的な分析がなされた。

4 結果

分析結果は、上で概説された個々の内容カテゴリーに応じて示す。主要なカテゴリーと下位カテゴリーのどちらの量的な結果も割合で提示され、それぞれ合計100通のドイツ語と日本語のEメールについて言及される。それぞれの言語における言語的な実現パターンを明らかにし、量的な調査結果を実証するため、データからの引用が提示される。それぞれの引用の最後にあるコードは、その引用が取り出された言語と場面を示している。したがって、G3とは、場面3において書かれたドイツ語のEメールからの実例である（表1参照）。本研究における量的および質的な研究結果に基づき、日本人の学習者に対するドイツ語指導への示唆が、各節の最後に示されている。

4.1 件名

ドイツ語のEメールの91%, 日本語のEメールの90%が, ヘッダーへの入力を行っていた。ドイツ語の66%, 日本語の50%が, そのEメールの「トピック」に関する言及をしていた。例を挙げると, ドイツ語では, »Seminar Linguistische Gesprächsanalyse [談話分析に関するセミナー] (G1)«, »Buch zum kopieren [コピーのための本] (G7)«, そして »Sprachkurs in Italien [イタリアにおける語学コース] (G8)« などであり, 日本語では, »明日の【名字】ゼミ (J1)«, »発表について (J3)« そして »語学コースの件 (J8)« などである。それぞれ約3割のEメールにおいて, 依頼そのものについての言及が含まれていた(ドイツ語: 33%, 日本語: 36%)。例として, ドイツ語では, »Bitte um Korrekturlesen [添削のお願い] (G4)«, »Ich brauche Hilfe! [助けて!] (G2)«, そして »Kleine Anfrage [ちょっとした質問] (G2)«, 日本語では, »お願い! (J1)«, »添削の依頼 (J4)«, そして »留学についての相談があります。 (J5)« が挙げられる。

ドイツ人に比べ, 日本人は, 件名に「自分の個人情報」を含めることが多かった(ドイツ語: 3%, 日本語25%)。その例としては, »総合科学部の【名字】【名前】と申します。 (J7)« というような自己紹介, »おはよう! (J1)« のようなあいさつ(ドイツ語: 2%, 日本語16%)や, »ごめん (><) (J1)« のような「読み手の負担を気遣う表現」(ドイツ語: 0%, 日本語: 7%)が挙げられる。その一方で, 代わりに, »ich war krank... [病気だった] (G2)« や »Seminarstoff verpennt [ゼミを欠席した] (G2)« のように, ドイツ語のEメールのうち6%に, 依頼の理由が含まれており, これは日本語のデータには現れていなかった。

件名の入力における言語的特性に関しては, 大部分のドイツ人と日本人が, »Korrektur [添削] (G4)« や »添削依頼 (J4)« のように, 名詞または名詞を合成した語 (noun compositions) を用いていた。その他には, »Bitte um Korrekturlesen [添削のお願い] (G4)« や »発表の期日について (J3)« のように, 前置詞または後置詞と共に名詞句を用いていた。»Ausleihe eines Buches [本の借用] (G7)« や »語学コースの件 (J8)« のような, 二格形式もよく見られた。概して, ヘッダーに入力されたデータは, 根本的な差異を明らかにしていない。しかしながら, 外国語としてドイツ語を学ぶ日本人の学習者(以下, GFL学習者)は, ドイツ語において, 件名に個人情報を含めることは日本語ほど普通でないということを意識させられるべきである。ドイツ語における件名の入力を適切に行うために, 学習者は, 前置詞や二格形式の使用も含め, ドイツ語で名詞句をどのように構成するのかということを知る必要がある。

4.2 あいさつ

本研究のデータに基づくと, ドイツ語のEメールの導入部は, 必ず(100%)「読み手への呼びかけの言葉」(address to the reader)で構成されている。一方, 日本語では, そのような呼びかけの言葉は, 必ずしも必要とされていない(70%)。このテキスト部分は, 多くの場合, あいさつによって実現される(ドイツ語: 62%, 日本語: 46%)。例を挙げると, ドイツ語においては, »Hallo [こんにちは] (G1)«, »Hi [やあ] (G6a)«, または »Grüß' dich [やあ] (G1)«, 日本語においては, »こんにちは。 (J5)« などである。その他には, より丁寧度が高い »Sehr geehrte/r ...«, または, 比較的丁寧度が低い »Liebe/r ...« などといった, 「呼称」(address terms)もドイツ語ではよく見られる(31%)。しかし, 日本語では, »~へ«などの「呼称」はどちらかといえばまれである(7%)。ドイツ語における »Herr« や »Frau« などの「肩書き」

(title) は、ほとんど教師に対してのみ使用されたのに対し、日本語において対応する言葉である「～さん」は、学生に対してのみ使用されていた。その他には、ドイツ人の先生のあて名を書く際、書き手は、Dr. と Professor のどちらかまたは両方というような、それぞれの学位を使用することが求められるが、日本語では、「先生」という「肩書き」を使用することで、社会的地位を示すことが適切とされている。全体としては、ドイツ語の Eメールの39%、日本語の Eメールの38% が、受信者の「肩書き」を含んでいた。GFL 指導においては、このような実証的な研究結果は、学習者が、Eメールの導入部における名前や「呼称」や「肩書き」の使用に関しての、ドイツ語と日本語の Eメールの違いを意識させられるべきであるということを含意している。

4.3 書き手に関係したテキスト部分

「書き手に関係したテキスト部分」は、ドイツ語の Eメールの33%、日本語の Eメールの66% に現れていた。ドイツ語では、このようなテキスト部分は、通常 Eメールの冒頭で見かけるが、日本語では、時として最後においても見かけることがある。特に、日本語の Eメールにおいては、このカテゴリーは、主に書き手の「形式的な個人情報」から成り立っていた（ドイツ語：33%、日本語：68%）。例としては、「私は広島大学総合科学部4年の【名字】【名前】といいます。現在○○言語のゼミを受けています。(J6a)」、名前（ドイツ語：11%、日本語：65%）や学籍番号（ドイツ語：0%、日本語：8%）、学位課程（ドイツ語：13%、日本語：51%）や学年（ドイツ語：4%、日本語：26%）などが挙げられる。ドイツ語の場合受信者とあまり親しくない場合に、使用されるだけだが、このカテゴリーは、「*mein Name ist [Vorname], ich studiere Wirtschaftsrecht und bin im 5. Semester* [私は（名前）と申します。私は現在5セメスターで、経済法について研究しています。] (G6)」というようなかたちで実現される。

一方で、ドイツ人の書き手は、以下に例示するように、むしろ彼らの最近のできごとや気持ちについての「個人的な記述」をする傾向にあり（ドイツ語：16%、日本語4%）、これらは Eメール全体で大きな割合を占めている。

»Ich bin seit ein paar Tagen wieder unter den Lebenden und muss jetzt echt dringend mal den ganzen Kram aufarbeiten, den wir in FM3 in den letzten paar Wochen so gemacht haben sollten. Du weißt ja, ich versteh die Sachen immer etwas langsamer als du. [私は、ここ数日具合が良くなってきてるよ。でも今は、私たちがここ数週間、FM3セミナーで取り組んでいることに急いで追いつかないと。知っての通り、私はあなたより、いつも記憶するのに時間がかかるからね。] (G2)«

これらの記述の機能としては、依頼に応じてもらう可能性を高めたり、読み手との関係などを強くしたりすることへとつなげるために、読み手に自分の状況を知らせることだと考えられる。このようにすることで、書き手は、読み手が依頼に応じるための同情や意欲を得ようとしている。ドイツ語では、このようなテキスト部分は、しばしば「*Wie du ja weißt* [知っての通り]」などの表現を含んでいる。しかし、日本語では、そのような記述はかなりまれであり、「体調不良でゼミを3週も休んでしまい、ご心配かけましたが、ようやく回復してきました。来週から復帰できると思います。(J2a)」が例として挙げられる程度である。ドイツ語において「書き手に関係したテキスト部分」を実現するためには、GFL 学習者は自分自身を紹介するための表現を知る必要がある。さらに、書き手を特定したり連絡を取ったりする必要がない限り、「形式的な個人情報」は冗長であるということも意識させられるべきである。その他には、読み手との関係を

確立または維持するために、ドイツ語のEメール交換では、読み手と書き手との間の親密度に
応じて、個人的な気持ちや最近のできごとに関する記述を含めることが非常に多いということが
指導されるべきである。

4.4 読み手に関係したテキスト部分

興味深いことに、日本語のEメールがドイツ語の場合に比べ、「書き手に関係したテキスト部分」
を2倍多く含んでいたのに対し、ドイツ語のEメールでは、「読み手に関係したテキスト部分」
を2倍多く含んでいた(ドイツ語:40%, 日本語:20%)。また、*»Ich weiß nicht, ob Du Dich
noch an mich erinnerst? Wir saßen beiden im X-Seminar bei Y im letzten Semester!? Daher
habe ich auch Deine E-Mail-Adresse…»* [私のことを覚えていてくれるか自信がないのです
が、Y先生のXゼミの授業を一緒に受けていた者です。そのため、あなたのメールアドレスを知っ
ています。](G6)◀というドイツ語の例にあるように、どちらの言語においても、これらのテ
キスト部分は、通常、「読み手と書き手が初めて連絡を取る」ということに言及することで実現
される¹⁾、(ドイツ語:31%, 日本語:19%)。このカテゴリーにおける類似した日本語の部分と
しては、*»先輩のメールアドレスをゼミの名簿で知りメールを送らせていただきました。(J6a)*
◀がある。

その他の読み手に関係したテキスト部分は、読み手の健康に関して言及する質問を含んでいる
ことが多い(ドイツ語:7%, 日本語:2%)。例としては、*»wie geht es dir? Wie läuft es in
der Uni? [最近どうしてる? 大学生活はうまくいってる?]* (G2)◀などが挙げられる。このカ
テゴリーの項目で、唯一日本語のデータにおいて見られたのは、*»元気にしてる? (J2)*◀であっ
た。ドイツ語のEメールでは一般的であるが、日本語では見られなかったもう1つのカテゴリー
として、*»Schönen Abend dir. [良い夜を]* (G2)◀ or *»ich hoffe, dass du die letzten drei
wochen gut ohne mich überstanden hast [ここ3週間、私なしで大丈夫だったならいいんだけど]*
(G2a)◀などの、「読み手への祈願がある」(ドイツ語:5%, 日本語:0%)。

「書き手に関係するテキスト部分」と同様に、ドイツ語では、特に書き手が友人である場合、
読み手と書き手の関係について言及することがより重要と考えられる。GFL指導において、こ
のような結果は、適切な方法を用いて、読み手との関係について言及したり、質問したり、読み
手への祈願をしたりするための言語的な手段を学習者が習得する必要があるということを暗示し
ている。

4.5 依頼の理由

依頼の状況に関わらず、どちらの言語においても、依頼についての1つまたはそれ以上の理由
(grounders)を与えることは重要である(ドイツ語:98%, 日本語97%)。通常、日本語による
依頼の理由が、依頼の前に置かれるのに対して、ドイツ語では、依頼の前後に比較的自由に置か
れる。どちらの言語においても、約3割の事例において、依頼の理由は依頼と統語的に接続され
ている(ドイツ語:33%, 日本語:30%)。この統語的な近接性は、依頼にとってその理由がど
れほど重要かということも強調している。日本語では、依頼の理由は、*»どうしても必要なの
ですが、良かったら教えて頂けませんか? (J6)*◀における「ので」、「が」、「し」などのように、
接尾辞と共に接続されることがよくある。ドイツ語では、*»Allerdings kenne ich mich überhaupt
nicht mit diesem Programm aus und brauche dringend jmd., der mir so die grundlegenden*

Schritte zeigen kann, um mit dem Programm einigermaßen effektiv zu arbeiten. [しかし、私はこのプログラムについて全く知らないので、うまく使うための基本的なやり方を教えてくれる人が至急必要なのです。] (G6a) «のように、*und* や *durch*, *so dass* や *daher*, *damit* や *auf Grund*, *weshalb* などの接続詞が用いられる。

どのような理由が与えられるかは、依頼の内容によって決まる。ドイツ人の69%と、日本人の56%が、*»Leider sind meine Kenntnisse der Sprache bereichsweise immer noch etwas unzureichend* [残念ながら、私はその言語にまだあまり習熟していません。] (G4) «や»体調がすぐれないので、ゼミを三週間休む事にしました。(J2a) «にあるように、通常、書き手の側が身体的または精神的に能力が不足していることに起因している、というような困難な状況に関する言及を行っている。ドイツ語のEメールの27%と、日本語のEメールの30%に、*»Ich interessiere mich dafür ein Auslandssemester in England einzulegen um meine Englischkenntnisse zu auszubessern.* [英語力を高めるため、1セメスターの間、イングランドへ留学してみたいと思っています。] (G5) «や»私には中国人のペンフレンドがいて、今回初めて中国語で手紙を書いてみたのです。(J4) «にあるような、願望や意図が述べられていた。さらに、ドイツ人の10%と、日本人の8%が、*»Ich kann leider nicht kommen, weil an dem Tag meine Oma ihren 80. feiert und ich dort auf jeden Fall zum Kaffeetrinken gehen muss* [その日は、おばあちゃんの80歳の誕生日を祝いにいかなければならないので、出席することができません。] (G1) «や»他大学の教授の先生とのアポイントが入ってしまったためにその日に発表を行うことが不可能となりました。(J3) «というような、義務についての言及を行っている。その他に、ドイツ人の45%と、日本人の32%が、*»ich habe von einem bekannten erfahren das du dich mit dem Computerprogramm SPSS auskennst* [あなたがSPSSに詳しいということ、友達から聞きました。] (G6a) «や»以前に【名字】さんもこのソフトを使ったことがあるって知って、メールしてみました。(J6) «などにあるように、依頼のために受信者を選んだ理由についても言及していた。

多くの場合、異なる理由を組み合わせたものが与えられていた。その他、どの種類の理由がどの場面で最も適切であるかということに関しては、両言語とも全般的に一致していた。GFL学習者が、彼らの願望や必要性、義務や落胆の状態などに関して、依頼の理由を挙げることができるとするには、語法の助動詞や *unbedingt*, *leider*, *gerne* などの法性を表す標識 (modality marker) の適切な使用法を指導される必要がある。これに加え、学習者は、理由を依頼に統語的に接続する方法を学ばなければならない。これらの接続詞の使用は、統語的な順番に影響するため、学習者はそれらを正確に使用方法を知る必要がある。

4.6 読み手の負担を気遣う表現 (excuses)

依頼の負荷を緩和するために謝罪することは、日本語においては、非常によくあることだが、ドイツ語においては、ほとんど用いられない。日本語のEメールの88%が、多くの場合、依頼の前に1つまたはそれ以上の気遣う言葉を含んでいたが、ドイツ語では、15%が様々な位置に含まれているだけであった。また、*»悪いんだけど先生に行かない事を伝えてくれん?* (J1) «にあるように、日本語の弁解の44%が、依頼と統語的に接続されている。一方、ドイツ語において、統語的に接続されていたのは、*»Ich weiß, dass du viel beschäftigt bist, aber es wäre wirklich wichtig!* [あなたがとても忙しいということは知っているのですが、これは本当に重要

なのです。] (G2) «のみであった。

特に、日本語の弁解は、多くの場合、当該発話行為を遂行して申し訳ないのですがというような、発話内力指示装置 (Illocutionary Force Indicating Devices, 以下 IFID) を含んでいた。具体的には、日本語の E メール の 75% が IFID を 1 つ含んでおり、21% が 2 つ以上の IFID を含んでいた。日本語では、そのような言葉が非常に多く、その使用は、»ほんまごめんね!!!! (>_<) (J2) «から»誠に申し訳ないのですが、(J3.4) «に至るまで、受信者や依頼の場面によって決まる。ドイツ語では、Eメールの4%のみが、IFID を含んでおり、»entschuldigung *das ich dich einfach so anschreibe* [Eメールでお知らせしてすみません] (G5) «にあるような名詞、または»Für die Ihnen entstehenden Unannehmlichkeiten möchte ich mich schon im Vorfeld entschuldigen. [これからかけるだろう迷惑に対して、先に謝っておきます] (G3) «にあるような動詞によって実現されていた。

日本人の35%と、ドイツ人の5%が、»ich hoffe es ist ok, dass ich dir einfach so maile. [このEメールを送っても大丈夫だったらよかったのですが] (G6) «や»突然のメールをすみません。(J6) «のように、Eメールを送ることに對して気遣っていた。日本人の16%と、ドイツ人の5%が、»Ich hoffe, es macht nicht zu großen Aufwand [これらがあなたにとって重荷にならなければよいのですが] (G4) «や»ちょっと迷惑かけそうなんだけど、(J1) «のように、迷惑をかけるという一般的な行為に對して気遣う言葉を記述していた。その他には、日本人の26%と、ドイツ人の1%が、時間をかけさせることで迷惑をかけるという行為に對して、より具体的に気遣っていた。日本語では、多くの場合、»[お忙しい中、邪魔してすみません] «にあるように、お忙しいという言葉で実現されていたが、ドイツ語では、唯一、»Mir ist bewusst, dass Ihre Zeit knapp bemessen ist [あなたに時間があまりないということは知っています] (G4) «のみが見られただけであった。

このような量的な差異に関して、読み手の負担を気遣う表現がドイツ語ではあまり一般的でないということと、慣用表現を母語から訳すことを控えるべきであるということ、GFL 学習者は意識させられるべきである。日本語における弁解は、しばしば感謝の気持ちを表すために用いられるため (Beebe & Takahashi, 1990 参照)、GFL 学習者は、ドイツ語では感謝や謝辞の表現がこの機能を代わりに遂行するということを教えられるべきである。これについては、次項で概説される。

4.7 謝 辞

弁解とは対照的に、感謝を表す表現は、日本語よりもドイツ語の方がより一般的に用いられる (ドイツ語: 78%, 日本語: 20%)。ドイツ語では、謝辞は通常、Eメールの最後の方に置かれる。今回の連絡に関する言及の前後どちらかに見られた。しかし、日本語では、謝辞の好まれる位置は特に認められなかった。弁解と同様、謝辞は、»Es wäre schön, wenn Du das für mich erledigen könntest. [あなたにこれをしていただけると、有り難いです] (G1) «や»目を通して頂けると嬉しいです。(J3) «にあるように、依頼と統語的に接続されることが多い (謝辞全体において、ドイツ語: 26%, 日本語: 41%)。ドイツ語による感謝の言葉の52%は、»Vielen Dank schon mal [感謝を込めて] (G4) «などの名詞や、»Danke dir. [ありがとう] (G2a) «などの動詞、または»Ich wäre Ihnen dankbar, wenn [~をしていただけると有り難いです] (G3.2) «のような形容詞を用いて実現される IFID を 1 つ含んでいた (2 つ含んでいるものも

4%あった)。

ドイツ語では、IFIDなしの謝辞は、»Über eine baldige Antwort würde ich mich sehr freuen! [早めにお返事をしてくださると有り難いです] (G8) «や»Sie würden mir damit sehr helfen. [そうしてくれることで、非常に助かります] (G7) «のような接続法の形式 (conjunctive form) や、»Es wäre toll, wenn Du sie mir (so weit es geht) beantworten könntest. [私の質問に答えてくださると、有り難いです] (G2a) «のような条件節を用いることによって実現されることが多かった。その他には、»Das wäre super lieb von dir. [親切にありがとうございます] (G1) «における主語としての»das«を含む、依頼への前方照応的指示がしばしば見られた。日本語では、感謝の表現は、G7やG8におけるドイツ語の実例と同様の方法で実現されている。例としては、»ありがたいです。 (J1.2) «や»本当に助かる。 (J1) «が挙げられる。受信者が教師や先輩の場合、日本人は、»いつもお世話になっています。 (J4) «という言いまわしを用いることも多く、これに相当するものはドイツ語には存在しない。

GFL指導の観点からは、学習者が、ドイツ語の依頼のEメールにおいて謝辞の必要性和機能に気づくことが重要である。言語的に実現するために、学習者は、様々な場面や受信者に対して、感謝を表す多種多様な表現を教えられるべきであるだけでなく、それらを依頼と接続するための接続形や条件節の使い方についても教えられるべきである。

4.8 埋め合わせの約束

埋め合わせの約束は、ドイツ語のEメールではよく見られたのだが (29%)、日本語のEメールではほとんど見られなかった (6%)。ドイツ語では、埋め合わせの約束は、通常、依頼やその理由などの後に続いていたのだが、日本語では、Eメールの最後に現れていた。本研究のデータにおいて見られた埋め合わせの約束のほとんどが、»Als Dank gehen wir schön essen, oder was auch immer! [感謝を込め、夕食か何かご馳走します] (G2) «のような、依頼に対する「埋め合わせの申し出」であった (ドイツ語19%, 日本語: 4%)。ドイツ人が、埋め合わせとしてコーヒーや食事を申し出ることが多いのに対して、日本人は、»今度なんかおごるわ! (J1) «のように、あいまいなままにすることが多かった。その他には、「負荷を最小限にするための申し出」もいくつか見られた (ドイツ語: 8%, 日本語: 2%)。例としては、場面3 (プレゼンテーションの日にちの変更) における、»Ich bin natürlich bereit, jeden anderen Termin stattdessen zu übernehmen [私は、その代わりとして他の日はいつでも大丈夫です] (G3) «や»いいものに仕上げようと思っています。いや、仕上げます。 (J3) «が挙げられる。

埋め合わせの約束は日本語においてはいくぶん珍しいが、ドイツ語の依頼のEメールにおいては頻繁に使用されているということをGFL学習者は、意識するべきである。また、埋め合わせの約束を遂行するために、文化的に慣習化された言語表現のどれが使われるのかということも教えられるべきである。

4.9 結びのあいさつ

Eメールの冒頭にある呼びかけの言葉と同様に、ドイツ人は、結びのあいさつについても、Eメールにおいて必須の部分であると捉えている (95%)。しかし、日本語のEメールでは、そのような言葉は極めてまれである (8%)。ドイツ語では、友人に対する»Bis dann (G1) «または»Liebe Grüße (G2) «や、教師に対する»Mit freundlichen Grüßen (G4) «または»Beste

Grüße (G4) « といった表現は、義務的なものであるようだ。日本語のデータで見られた数少ない項目としては、地位が同等の人に対する「それでは (J2) « と、目上の人に対する「それでは失礼します (J7) « があった。別れの言葉以外では、ドイツ語の Eメールの88% と、日本語の Eメールの36% に、Eメールの最後に書き手の名前が含まれていた。日本語の Eメールには、場合によっては、書き手の姓のみ、または姓の後に名という形で含まれていたが、これはドイツ語ではあまり見られない。ドイツ人は、通常、受信者が同じ学生である場合は名のみを、教師の場合は名の後に姓を書いている。

GFL 指導に対しては、このことは、Eメールを結ぶための名前の適切な使用方法に加え、ドイツ語において Eメールの最後で名前を書くことは、別れの言葉と同じくらい当然のこととして期待されているという事実を教えられるべきであるということを示唆している。さらに、後者については、異なるコンテキストに対する十分な表現が教えられるべきである。

5 おわりに

ドイツ語と日本語の依頼の Eメールの分析結果は、その構成の方法におけるいくつかの興味深い差異を明らかにした。ドイツ語の依頼の Eメールは、ドイツ語において手紙を書く際の慣習を忠実に守る傾向があった。つまり、初めに読み手への呼びかけの言葉、そして終わりに別れの言葉があり、書き手の名前前で終えるというやり方が決まっているということである。この点では、日本語の依頼の Eメールは、あまり形式的な縛りがないようである。あいさつや別れの言葉における慣用表現は、ドイツ語の Eメールではしばしば見られるのだが、日本語ではむしろ珍しい。同様に、呼びかけの言葉において、読み手の名前を書いたり、結びに書き手の名前を書いたりすることも強制されないようである。

読み手または書き手に関係したテキスト部分に関しては、ドイツ人は、彼らの気持ちや最近のできごとについての個人的な記述をしたり、読み手へ質問したり、幸運を祈ったりすることで、読み手との関係を強調する傾向にある。このように、読み手と書き手の関係を強調することは、日本語では非常にまれである。その他の量的な違いとしては、読み手の負担を気遣う表現や謝辞といった、依頼の負荷を最小限にする機能を持つような発話行為の使用が挙げられる。ドイツ人は、謝辞を多用することによって、依頼された行為に対する感謝の意を表する傾向がある。一方、日本人は、読み手を気遣うことで負担を認識しているということを表すことを好む。

これらの調査結果は、しばしば観察されるような、テキストを構成する方法における異文化間の差異を明確に示しており、外国語教育への示唆を有している。ドイツ語と日本語の依頼の Eメールに関しては、日本人のドイツ語学習者は、それらの差異を意識させられるだけで学習を終えるべきでない。つまり、Eメールのそれぞれのテキスト部分を実現するため、学習者は言語的な手段も有する必要があるということだ。本研究の質的な結果は、GFL 学習者が、目標言語においてより適切に依頼を書くことを手助けするような教材を作成するための、実証的な基礎として使用されうるだろう。

注

- 1) この下位カテゴリーが高い頻度を示しているのは、本研究における依頼場面の50% が、読み手を知らない場面であるということに起因している。

参考文献

- Beebe, L.M.; Takahashi, T.; Uliss-Weltz, R. 1990. Pragmatic Transfer in ESL Refusals. In: R. Scarcella, E. Anderson, S.D. Krashen (Hgg.). *On the Development of Communicative Competence in a Second Language*. Cambridge, MA: Newbury House, 55-73.
- Blum-Kulka, S., J. House & G. Kasper. (1989). *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Brown, P. & S. Levinson. (1978). Universals of language usage: Politeness phenomena. In E. Goody (Hrsg.). *Questions and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press, 56-289.
- Brown, P. & S. Levinson. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dürscheid, C. (2007). E-Mail: eine neue Kommunikationsform? In: Sandro Moraldo (Hg.). *Internet.kom. Neue Sprach- und Kommunikationsformen im World Wide Web*. Rom (Aracne Editrice).
- Harting, A & K. Yamaki. (2005). Innere Stimme oder äußerer Anspruch? Zur Integration produkt- und prozessorientierter Verfahren der Schreibdidaktik *Neue Beiträge zur Germanistik* 4,1, 72-90.
- Harting, A. (2006a). Investigating German and Japanese Apologies in Email Writing *JALT Proceedings*, 1192-1201.
- Harting, A. (2006b). Erwerb und Vermittlung kultureller Ausdrucksformen von Sprachhandlungen und Textsorten im japanischen Deutsch als Fremdsprache Unterricht *Hiroshima Gaikokugokyoiukenkyu* 9, 101-113.
- Harting, A. (2007). Höflichkeit in deutschen und japanischen Bitten: ein Forschungsüberblick *Hiroshima Gaikokugokyoiukenkyu* 10, 109-126.
- Harting, A. (2008). ドイツ語と日本語における E-メールの対照研究: 筆記による依頼のストラテジー, *Hiroshima Gaikokugokyoiukenkyu* 11, 121-131.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment: two neglected aspects of linguistic politeness. *Multilingua* 8 (2/3), 223-248.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12 (4), 403-426.
- Mayring, P. (2003). *Qualitative Inhaltsanalyse: Grundlagen und Techniken*. Weinheim: Beltz.
- Schmitz, U. (2007). E-Mails kommen in die Jahre. Telefonbriefe auf dem Weg zu sprachlicher Normalität. In: A. Ziegler & Christa Dürscheid (Hgg.). *Kommunikationsform E-Mail*. Ort: Stauffenberg. .

謝 辞

本論文の執筆にあたっては広島大学大学院教育学研究科博士課程前期（言語文化教育学専攻）福田有司氏に日本語翻訳をしていただいた。ここに記して謝意を表したい。しかしながら、本論文中の記述に関しては、すべての責任を論文筆者が負うものである。

ABSTRACT

Composition of Email Requests: A Contrastive Analysis

Axel HARTING

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

The observation that email requests written by Japanese learners of German often fail to meet politeness requirements, prompted me to conduct research on German and Japanese writing styles. For this purpose, a database consisting of 200 request emails written by German and Japanese students was collected. To facilitate the comparability of the data and to allow control of situational variables, the emails were collected within an experimental framework. One hundred randomly-selected German and Japanese students respectively were asked to write an email based on a writing task aimed at eliciting a request frequently occurring in a university context.

The results of the analysis of the request sequence have already been described in Harting (2008). The focus of this article is to look at how the requests are embedded in the email, i. e. which other text parts are employed to form an appropriate email request in the languages under investigation. Based on findings in text linguistics and contrastive pragmatics, the formal, structural, and linguistic properties of these emails were analysed qualitatively and quantitatively according to situational variables. The analysis aimed to uncover which individual text parts, such as the greeting, reasons for the request, the farewell statement, etc. are commonly used in the languages under investigation and how they are realised linguistically. Of particular interest was the performance of the request sequence.

The results reveal structural differences in German and Japanese writing styles as well as differences regarding content and language use. While German emails structurally adhere strictly to writing styles of German letters, i.e. they contain a greeting, a farewell statement and the writer's name at the end, the text norms of Japanese emails are more flexible in this regard. At the content level, German writers make extensive use of expressions of gratitude and promises of forbearance in order to support their request, while Japanese writers prefer apologies for the imposition and repetitions of the request. As far as the language level is concerned, German writers express themselves more individually by using creative forms of expression and humour, while Japanese writers are more formal by making extensive use of routine formulae.

The comparison of German and Japanese request emails forms the basis of a larger research project aimed at developing teaching materials that shall enable Japanese students to write German emails more appropriately. My future research will focus on the difficulties that Japanese learners of German have when writing requests in the target language and in which way they can be supported in this effort.